

4-1-7-2 発達心理科

1. 発達障害と学童期のこころの問題の特化して

宮尾益知医長、中野三津子医員と、レジデントとして広瀬宏之、縄手満が診療にあたっている。研究生としては、医師として東部療育センターの本田真奈美、聖路加病院小児科の小林明雪子が、臨床心理士として白百合女子大学の酒井裕子が、研究助手・秘書として日本大学国際関係学部の村上靖彦、早稲田大学国際情報通信科の池下花恵が参加している。

そのほか、精神科医師、児童精神科医師、小児科医師、小児神経科医師、臨床心理士などの見学および教育なども行ってきた。

診療と社会的システム

児童を核とした家族機能の再構築および研究活動を思春期心理科、育児心理科と協力し、教育機関との具体的な連携、地域連携などを行っている。

発達心理科の初診患者数は、2005年度においても、一日平均約2.3人とほぼ前年度と同様である。一日あたりの外来患者数も約28人とほぼ前年度と同様であった。疾患としては、広汎性発達障害が最も多く、ADHD、LDがその次に多かった。新患者数は、406人であり幼児156名、小学校低学年112名、高学年78名、中学生33名、高校生以上27名であった。

診断分類としては、症状を含む器質性精神障害2名、その他の統合性失調症2名、気分障害5名、神経病性障害など32名、行動症候群3名、成人の人格および行動の障害2名、精神遅滞47名、心理的発達の障害220名、小児期の行動の障害67名、そのほか26名であった。男女比は、314体92名である。外来患者は、一日平均29名であり、年間総数は7090名であった。

入院については、一日あたり年間平均約1.5人の入院があったが、当センターが精神科専門病棟を有しないため、他院への紹介入院となることが多く、これからの課題である。入院目的としては、発達障害の評価と治療方針の決定が主なものであり、脳機能を含めた入院、評価がこれからの主な入院目的となる可能性が高い。また、他科の入院における基礎疾患としての発達障害などについてのリエゾン依頼の症例も多く、耳鼻科、眼科、アレルギー科、血液腫瘍科などとの協力体制により心と体の二面から見たこどもの治療を実践した。

以上のように、外来および入院を常勤医宮尾、中野と研修医である広瀬が行い、診療に加え、レジデント教育と研究に追われている毎日である。

1.1 発達障害の問題点への対応

学童期の様々なこころの問題がクローズアップされるようになり、昨年4月には発達障害者支援法が施行された。学習障害、注意欠陥多動性障害、広汎性発達障害などの発達障害において知的に大きな遅れのない「高機能、あるいは軽度？」発達障害に対する診断、治療、学校を含めた社会における対応、思春期を含めた予後などについては、昨年度よりは、関心の段階から、具体的個別の対応に移ってきている。発達心理科は、発達障害に対して、診断のみでなく、栄養、環境、家庭生活、教育環境を含めた具体的な指導を行っている。医学の分野としては、前頭葉機能検査、知能検査、認知検査を含めた心理発達検査に加えて、様々な脳機能の器質的な評価、機能的な評価をMRI、F-MRI、CT、SPECT、NIRSなども必要に応じて行っている。次の段階として、具体的なマニュアル作りとハイテクを応用した教育ツールの開発が現在進行中である。

1.2 学童期のこころの問題点への対応

就学前あるいは学童期には様々なこころの問題が起こってくる。児の有する発達障害などの一次性障害に加えて、様々な二次性障害、あるいは家族内・関係の問題などについても、多面的な複数の医者による診療を行う方向で、診療を行っている。また、チック、爪かみ、不登校、抜毛などの学

童期特有の精神的な症状については、中野医員を中心に診療を行っている。

2. 研究活動、広報活動など

2.1 研究活動と発達障害プロジェクト

宮尾は、ゲームの処方箋プロジェクトを、早稲田大学国際情報工学部門、こどもメディア研究所、ナムコと共同にて、立体視ディスプレイを用いて、発達障害に対する支援プロジェクトの第一弾として学習障害支援ソフトの開発を研究助手である池下と行い、読字障害における有用性を確認した。また、映像刺激の生体に及ぼす影響についての研究を光トポグラフィーを用いて、縄手と共にやっている。様々な認知と脳に与えるデジタルコンテンツの影響が明らかにされつつあり、アニメの制作、光刺激の与える自律神経系の問題について明らかになりつつある。また、発達障害における脳機能解析として広瀬と共に、SPECT を用いた脳機能の解析により、発達障害の解剖学的関係、ネットワークとしての障害が明らかになりつつある。

そのほか、学芸大学名誉教授の若葉陽子とともに吃音の病態生理の研究、白百合女子大学臨床研究センター五十嵐一枝センター長と共に、軽度発達障害の日本および中国の比較研究を行っている。広汎性発達障害のこころの発達と、自我の形成について村上と共に視線ベクトルから始まる自我の形成についての仮説を適応し、実証を行っている。心理学的アプローチとして、WMについての様々な発達障害における問題について酒井と共に、前頭葉機能としてとらえることで問題点を明らかにしつつある。中野は、虐待や様々なこころの問題を有する子供たちの、ストレスの解釈とリラクゼーションについての科学的裏付けを自己フィードバックに応用するために研究を行っている。成育推進10カ年計画については、「発達障害の早期発見と早期介入」のための、データベース作りと評価方法、早期発見のためのチェック項目、ツールの作成を行っている。発達障害と虐待の関係は、相互に関連し複雑な様相を呈してくる。虐待の主における認知発達の特徴と支援について、データベースを構築しつつある。これらの研究を総合的に、脳科学の面から解明していくことにより、次世代のこどもたちの社会生活訓練にも活用することができ、マスコミ等で騒がれている様々な行動の問題の解決にもつながると考えられる。

2.2 広報活動

教育現場を含めた社会への広報活動として、様々な現場において講演、広報活動を行った。また、奇数月の最終火曜日には、発達障害の科学的側面と実際的な対応について、こころの診療部公開講座「発達障害：理解と対応」を当センター、一階講堂にて行っている。毎回、150人を超える患者、両親、教育関係者、心理士、言語聴覚士、作業療法士、児童相談所など多くの参加があり、有用な講演に加え活発な討論が行われている。

宮尾は、様々な学会において小児に関係する診療科における「発達障害」としての治療ストラテジーについて教育講演を行った。言語聴覚士の教育、臨床心理士の教育などとともに、マスコミなどを通じて国立成育医療センターの小児診療における重要性をこころの発達の面から行っている。

また、社会的なニーズからのネットワーク作りの一貫として、地域社会、教育、医療関係者のための講演活動を年間10回程度行っている。

(1)学術フロンティア構想、軽度発達障害(広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害、学習障害)の日本比較研究

(2)子どもの虹情報センター:被虐待児の認知に関する研究

(3)成長科学協会指定研究課題、こころを育てる遊び

(4)TVの効能に関する産学連携研究プロジェクト「ゲームの処方箋プロジェクト:発達障害児における学習支援ツールの開発」

(5)基準認証開発事業「映像の生体安全性評価の標準化」

(6)文部科研:吃音の病態研究